

令和四年度 都立八王子東高等学校経営報告

1 今年度の取組と自己評価

(1) 教育活動への取組と自己評価

① 学習指導

新型コロナウイルス感染症の流行は依然として続いてきたものの1年間を通してほぼ通常通りの学習活動を行うことができた。1年生から新学習指導要領に基づく新しい教育課程による授業が開始され、特に国語科や地理歴史科、英語科では新しい科目の授業が開始された。また評価も観点別評価となり、学習指導要領改訂の趣旨を踏まえた教育を行うため指導内容・方法や評価方法の見直し等が行われた。評価については前年度から校内研修を実施する等の準備を進めてきたが、実施してみると課題も明らかになり修正を加え何とか定着させることができた。

本校では昨年度より生徒全員がタブレットPCを購入しており、Teamsを活用した課題配信や生徒からのレポート等の提出も定着しており、ICTを活用した授業をはじめ、ペアワークやグループワークを適宜取り入れた授業など、生徒の主体的な学びを引き出そうとするアクティブ・ラーニング型の授業が多くの教科で行われるようになった。大学入学共通テストで8割以上の得点が取れる水準を目指した授業についても定着しつつある。また、今年度より授業公開週間を新設し、この期間に本校教員も他の教員の授業を見学することを試みたが、十分活用することができなかった。校内研修を含め次年度は一層充実させていく。

各教科の学習指導については、定例の教科主任会で報告や情報交換を通して課題を整理した、特に今年度は進路指導主任も会議に参加し、学習指導と進路指導の連携を強化し一定の効果が見られた。

本格実施4年目となった探究学習は取組みが定着し着実に成果を上げている。外部の講師を招いての講演会や校外の研究施設の見学などの機会も増え多くの生徒が参加した。大学や企業、自治体等との連携をさらに強化し一層の充実を図っていく。

② 進路指導

学校全体で指導のベクトルを揃え、大学入学共通テストフル型受験を基本とする現役国公立大学合格のための指導を行った結果、難関国公立大への現役合格者数は昨年度の9名を大きく上回る16名となり、進学指導重点校に求められる目標数値(難関国公立大現役15名以上)をクリアした。また、国公立大学の現役合格者数は111名であり、昨年度(103名)を上回った。特に共通テスト後の個別指導で学力を伸ばした生徒が多く、目標達成まで最後まであきらめさせない指導の効果があったと思われる。また、探究学習の成果を活用して国立大学の総合型選抜や学校推薦型選抜で合格した生徒も増加した。

進路部と学年、教科が一体となった指導体制の確立や学習レベルに応じたきめ細かい指導を一層進め、生徒の「高い志」を育成し、目標達成のために粘り強く努力する指導を行い生徒の進路実現を目指していく。また、探究学習の取り組みを活かした進路指導計画を整備し、探究学習の成果を進路実現に活かしていく。

③ 募集・広報活動

昨年同様、探究学習の取り組みの成果や国公立大学への合格者数が多いことなどを積極的に広報したが、学校説明会の参加者は昨年を下回り、応募倍率も推薦、学力検査に基づく選抜共に低下した。

これまでの広報活動を見直し、ホームページやTwitter等によるタイムリーな情報発信、学校案内の早期完成、各種説明会の時期、内容、募集方法等の改善・充実に努めるとともに、教員や生徒による中学校訪問など直接の広報活動の充実を図って、本校の良さを多くの中学生や保護者、都民に理解してもらえるような取組みを進めていく。

④ 生活指導

基本的生活習慣や挨拶、ルール・マナーの徹底を呼びかける取組を進め、生徒の意識向上を図った。特に服装指導については全教職員の共通理解のもとに指導する体制を確立した。また、スクールカウンセラーとの連携により、心身に不安を抱える生徒の定期的なケアを実施するとともに、関係機関とも連携した対応を行った。

地域からの評価も含めて、交通マナー等についての改善は継続的な課題である。いじめ・体罰を許さない環境づくりについても、校内研修や生徒への意識啓発等を計画的に実施しており、今後も引き続き、適切な指導がなされるよう教職員、生徒の意識啓発を図っていく。

⑤ 特別活動・部活動

学校行事については新型コロナウイルス感染症の感染防止に努めながらほぼ当初の予定通りに実施した。6月には二部制ではあったが全学年の生徒が参加しての合唱祭を初めて実施した。9月には本校最大の行事であるしらかし祭を三年ぶりに全学年合同で保護者、中学生に公開する形で実施した。いずれの行事も生徒達にとって初めての体験であったが、実行委員の生徒を中心に積極的に活動し成功裏に終えることができた。

部活動についても、夏季合宿は十分実施できなかったもののそれ以外の活動は順調に実施することができた。新たに弓道同好会が設立されるなど活動の幅も広がってきている。

京都大学や東京都立大学との高大連携プログラムでは参加生徒の積極的な取組について大学側からも高評価を得た。八王子東特別支援学校との交流活動なども行事として定着し、担当生徒が企画・運営面でも主体的に創意工夫を発揮することができた。

本校の新たな特色として計画していた海外との交流事業については、2月末に台湾高雄高級中学校訪問、3月末に初めてのカナダトロントでの海外研修を実施することができた。いずれも長期間にわたる校内での研修と現地での研修を組み合わせた本校独自のプログラムであり、大きな成果を上げた。

今後も特別活動・部活動、海外との交流事業を積極的に実施し、生徒の自主性や企画力、実行力、折衝力等の育成に努めるとともに学校の特色化に役立てたい。

⑥ 心身の健康づくり

養護教諭、担任、学年、管理職と十分な情報共有を図りながら、各種保健対応を行うことができた。全教員対象の校内研修会では、特別支援教育に関する理解啓発を図るとともに、発達障害等に関わる知識を共有した。

また、生徒相談委員会や各学年に配置した特別支援コーディネーターを活用し、特別な配慮を要する生徒への支援体制もより一層整備された。今後も、スクールカウンセラーや学校医、ユースソーシャルワーカー等とも連携して、個々の生徒の心身の状況に配慮したケアを実施していく。

⑦ 学校経営・組織体制

毎週行われる各分掌部会や教科会での議論が集約された形で企画調整会議が行われ、学校経営計画を具現化することを意識した組織的な学校経営が実行できた。特に進学指導重点校としてのミッションを遂行すべく、各種数値目標の達成に向けて教職員の意思統一を図りながら各種取り組みを行うことができた。

教職員の服務については厳正に対応できており、この状況を継続できるよう努めていく。経営企画室は、経営参画ガイドラインに従い適正に業務を行うとともに、今後は一層の経営参画機能を高めていく。

⑧ 健康で明るい職場づくり

進学指導重点校として、日々の授業準備やきめ細かな面談指導など、個々の教員に求められる業務は過重になりがちである。子育てに積極的に関われる職場にするなど、環境の改善に一定の成果は得られた。ライフ・ワーク・バランスを意識し、教職員の健康管理や働きやすい職場環境の構築という点では、今後も引き続き改善を図っていく必要がある。

(2) 重点目標への取組と自己評価

〈数値〉

- ① 難関国公立大学(東大・京大・一橋大・東工大・国公立医学部)現役合格者数15名以上
(R2実績15名、R3実績9名、R4実績16名)
- ② 国公立大学合格者数(現役) 100名以上(R2実績112名、R3実績103名、R4実績111名)
- ③ 大学入学共通テスト受験者のうち5教科7科目型受験者数 240名以上
(R2実績211名、R3実績199名、R4実績213名)
- ④ 大学入学共通テスト(5・7・6・7型)全国平均上回り率1.25以上の得点者 75名以上
(R2実績66名、R3実績52名、R4実績52名)
- ⑤ 入学者選抜の最終応募倍率 推薦:3.0倍、一般:1.5倍
(R2実績3.26倍・1.52倍、R3実績2.66倍・1.61倍、R4実績1.60倍、1.22倍)

〈詳細〉

- ① 難関国公立大学の合格者は合計16名(東大1・京大2・一橋大6・東工大5・医学部医学科2)となり目標数値を2年ぶりに上回った。また、国公立大学合格者も111名と昨年(103名)を上回った。最上位を意欲

的に目指す生徒を計画的に育成することと同時に、二番手層以降の学力をさらに高め、学校全体としての高い進路実現を可能にすることが本校の大きな課題となっている。現役で国公立大学に合格するという大きな目標は全校生徒に共有され、一定の成果を出し続けているが、果敢に最難関を目指そうという生徒層を厚く育成していく工夫が一層求められる。

- ② 本校が培ってきた組織的な進路指導を一層徹底したことにより、結果として国公立大学現役合格者数は一定数を輩出している。しかし、成績上位層が薄くなってきているのに加え、生徒の現役・首都圏、安全志向が高く、第1グループ受験者数を増やすことが難しくなっている。一方で昨年度に続き探究学習の成果を活かし総合型選抜や学校推薦型選抜で国立大に合格した生徒も出ており、大学入試改革で総合型、学校推薦型選抜が拡大される流れの中で、本校の特色である探究学習の成果を活かした進路指導体制を確立する必要がある。
- ③ 大学入学共通テストをフル型で受験するという本校の基本方針は、生徒・保護者にも浸透しており、全ての教科・科目をきちんと学習するという基本姿勢は定着できている。安易に受験科目を絞り込ませず、最後までトータルな学力を伸ばすことが重要であるという指導方針は今後も堅持していく。
- ④ 今年度の大学入学共通テスト平均点上回り率1.25以上を達成した生徒は、文系で29名、理系で23名であり、昨年と同様であった。また昨年同様2番手層や下位層の育成に課題が残った。
- ⑤ 今年度の募集対策では、昨年度と同様に探究活動の取組などを積極的にアピールすることを行った。HPと学校案内のリニューアル、小学生・保護者対象説明会も実施した。しかしながら応募倍率は推薦、学力ともに大きく低下した。

ホームページやTwitter等によるタイムリーな情報発信を行い、特色である充実した探究活動やグローバル化に向けた取り組みなどを全面に出した広報戦略を引き続き打ち出していくことが必要である。

2 次年度以降の課題と対応策

【課題】

- ① 探究的な学習を計画的に実行するための組織体制とカリキュラムや評価についての研究開発と定着。
- ② 最難関への挑戦、頂点を目指すチャレンジ精神の育成と学力向上に向けた指導体制の確立。
- ③ 探究学習の成果を学校外での活動や進路指導に発展させる体制の確立。
- ④ 生徒の主体的な深い学びを実践するための授業改善、カリキュラム研究。
- ⑤ ホームページや学校案内の更なる充実と募集広報活動の活性化。
- ⑥ 海外交流の活性化など、グローバル人材の育成姿勢を図る教育の充実。

【対応策】

- ① 探究的な学習活動を定着させ、生徒の主体的な学習を一層推進していくための体制整備とカリキュラムや評価についての研究開発とその定着を図る。
- ② 最先端の研究や技術等に触れさせることなどを通して、早い段階から最難関大学(第Ⅰグループ)を意識させ、各分野でトップを目指すには自ら高い目標を設定し、最後まで目標を貫徹することが必須であることを学年集会やHRなど、様々な場面で生徒に意識付ける。生徒の学力向上のため進路指導部、学年、教科が一体となって指導する体制を確立する。
- ③ これまでの探究学習の成果を活かし、外部のコンテンツ等に積極的に挑戦させたり大学入試に活用させたりする体制を確立する。
- ④ 学習・生活指導や特別活動等を含めて、生徒に自主的・能動的な行動を促し、日々の活動を通じて自己への自信を培い、自己肯定感を育成する。
- ⑤ 教職員のみならず、在校生を活用した広報活動や、卒業生保護者や同窓会、後援会による協力など、学校内外の人的資源を活用して募集広報活動の活性化を図る。
- ⑥ 『Global Education Network 20』の取り組みを一層進め、台湾高雄高級中学校との姉妹校交流、カナダトロントをフィールドとする海外研修などの諸事業を推進する。